

みのかも文化の森 学校活用の考え方と目指すこと

みのかも文化の森は、開館前から学校が博物館を活用しながら学習活動を行うことができるよう、学校活用のプランを検討してきました。開館の2000年は「総合的な学習の時間」の全面実施の時期と重なったこともあり、すべての学年での多教科の活用を目指し活発な検討を学校とともにを行い、そこでの議論が今の活用の基盤となっています。

□文化の森だから実現できる学校活用の特徴

- ・子どもの実態や学習指導要領をもとに、活用プログラムを検討の上、作成しています。教科の授業としてカリキュラムに位置づけることで、単なる見学だけで終わらない継続的な学習の機会となることを考えています。年に一度はどの学年も来館できることを目指し計画をします。
- ・文化の森の「人・もの・こと・場」を活用することで、「本物」との出会いを活かした「ここでしかできない活動」を通して得られる気付きや感動を大切に、深い学びを目指しています。四季おりおり姿を変える自然や太古の人々が住んでいた証である遺跡や遺物、周囲の風景に溶け込んだ彫刻など、この文化の森という場が持つ空気感も含め、すべてが「本物」から学ぶ素材です。
- ・文化の森では様々な人との出会いがあり、人の言葉からと人の姿から学ぶことができます。学校の先生や保護者以外の大人であるボランティア、隣にいる友達や博物館のスタッフである学芸員と話しをしたこと、かけられた言葉、思わず口からでた言葉など他の人の関わりを大切にし、この積み重ねが豊かな学びにつながります。

文化の森という「教室」で、新しい気づきや知ることの喜び、楽しさのきっかけがどの子どもにも手に入れられる、そのような学習のあり方を築いていきたいと考えます。文化の森の学校活用は、子どもたち全員が等しく得ることができる「博物館の原体験」です。

□学習の効果を高めるために

- ・学校との日程調整や活動準備など、学校活用に関わる業務を担当する学習担当を配置しています。
- ・各活用の前に学習担当と担任の教員が必ず顔を合わせて打ち合わせを行います。活動内容だけでなく、活動のねらいや事前事後の学習とのつながりなど、各学校や児童生徒の実態に合わせた活動内容とすることを大切にしています。
- ・子どもたちの学びに寄り添い声を掛ける、時には講師となる学習支援ボランティアがいます。担任の教員や保護者以外の大人の姿から多くの刺激を得られます。
- ・学校活用で来館する際の交通手段としての「バス」を市の予算で手配しています。
- ・市内の小中学校では、校務分掌として「文化の森活用委員」を1名配置しています。その教員と文化の森の職員が「文化の森活用委員会」を設け、学習活動の工夫や運営について話し合います。
- ・文化の森活用委員会での結果や一年間のプログラム、活用の教員による振り替わりをまとめたものを『文化の森活用の手引き・活用実践集』として毎年刊行しています。
- ・文化の森での学びが子どもたちの中でどのように捉えられているのか、長期にわたる関わりによる変化を知る手がかりとして、6年生アンケートや成人式アンケートを実施しています。ここでの学びの経験やあり方を検証し、改善に努めています。

以上のような文化の森の学校活用は、次の3点につながると考えます。一つ目に博物館という場での出会いの経験を通して、生涯にわたり博物館と関わり学ぶ楽しさを知ること、二つ目に、その枠にとらわれず心豊かで文化的な市民となる素地を育むこと、三つ目に、未来を創りだしその担い手となることのできる「市民」を育むことです。